ことば・認知・インタラクション10
220310@Zoom

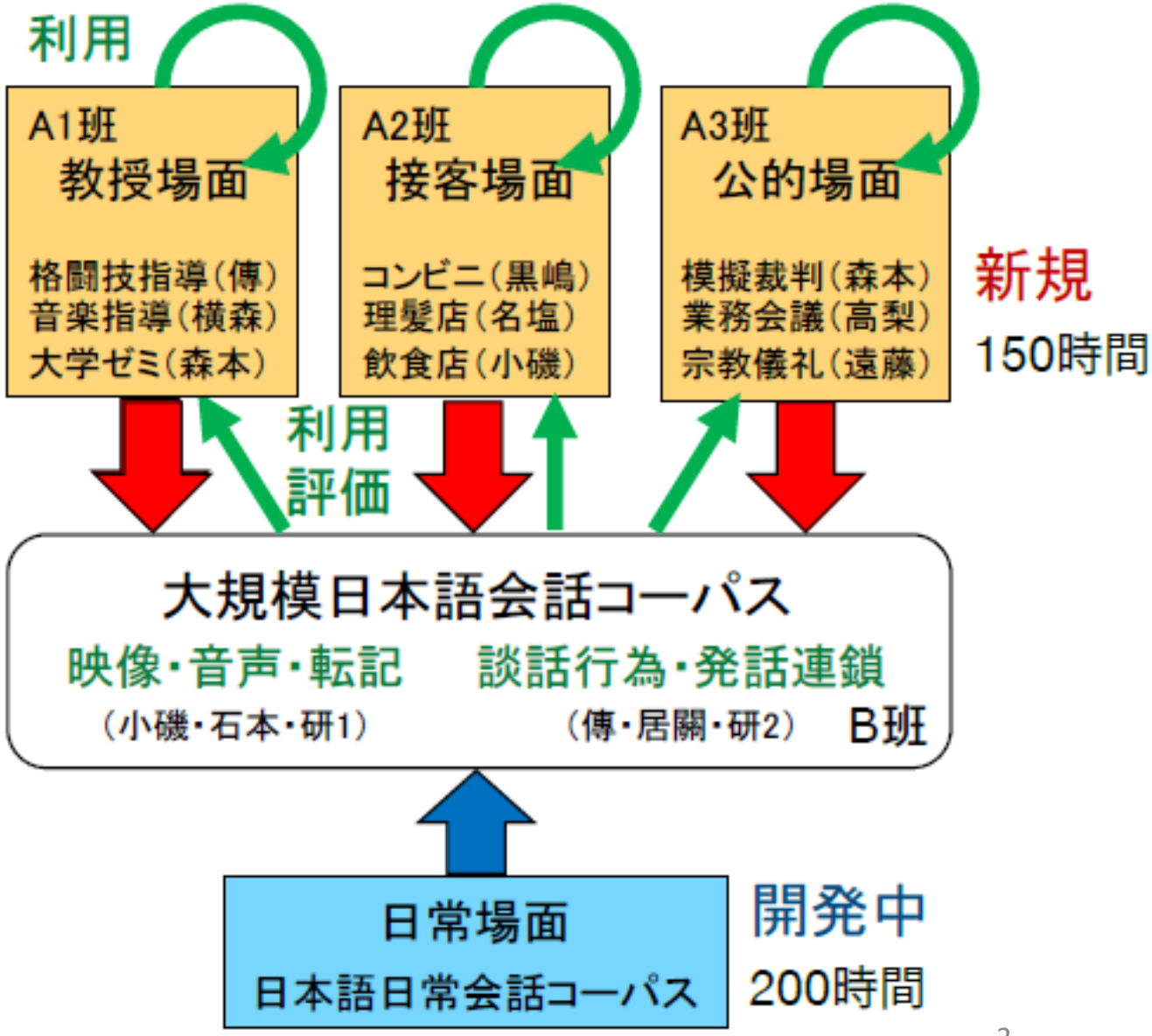
フィールドインタラクション分析の技法としての「活動」概念

高梨 克也（滋賀県立大学）
takanashi.k@shc.usp.ac.jp

基盤研究(A)：日常場面と特定場面の日本語会話コーパスの構築と言語・相互行為研究の新展開（傳 康晴）

場面ごとの
個別的特徴が重要

- 特定場面：
  - 教授・接客・公的場面
  - 共有可能なデータが存在しない
- 日常場面コーパスと統合した大規模日本語会話コーパスを構築



シリーズ「フィールドインタラクション分析」

ひつじ書房

- ビデオデータの相互行為分析をフィールドワークの手法として用いる

第1巻：『多職種チームで展示をつくる～日本科学未来館「アナグラのうた」ができるまで～』(高梨克也)（2018）

第2巻：『鮨屋で握りを注文する』(平本毅)（近刊？）

第3巻：『ロボット演劇で会話をつくる』(坊農真弓)

第4巻：『介護施設で身体をうごかす』(細馬宏通)

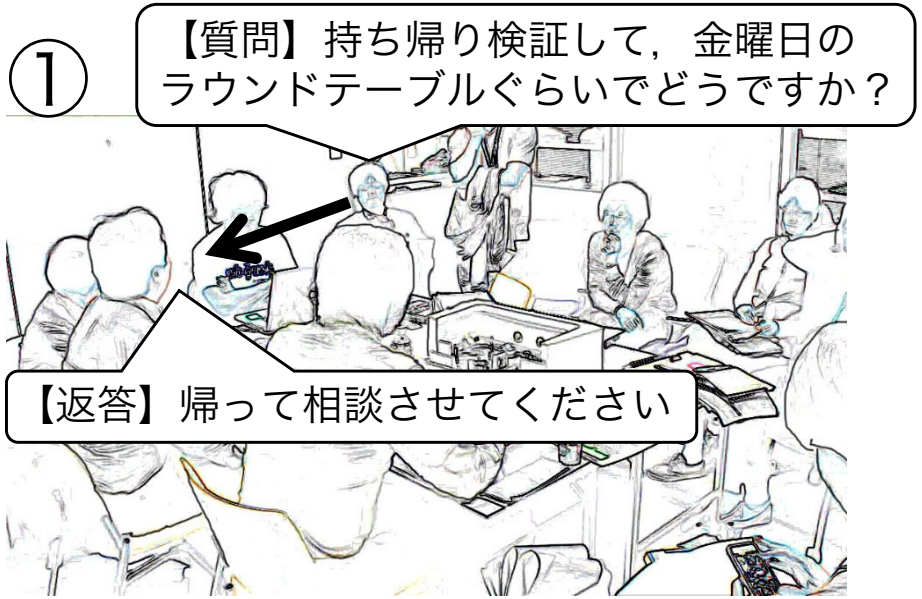
第5巻：『三夜講で火祭りを準備する～野沢温泉道祖神祭りの伝承を支える多世代協働インタラクション～』(榎本美香)（近刊）

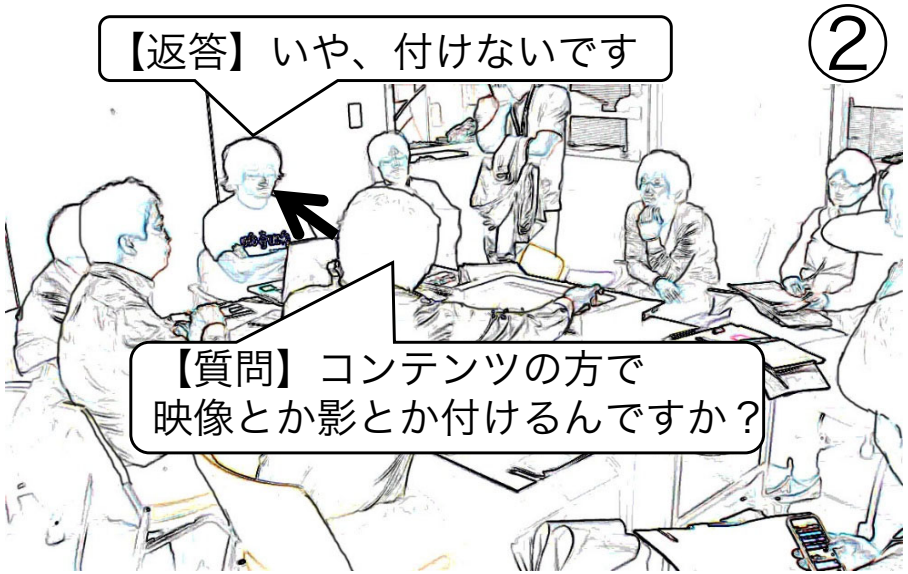
日本科学未来館「アナグラのうた～消えた博士と残された装置」

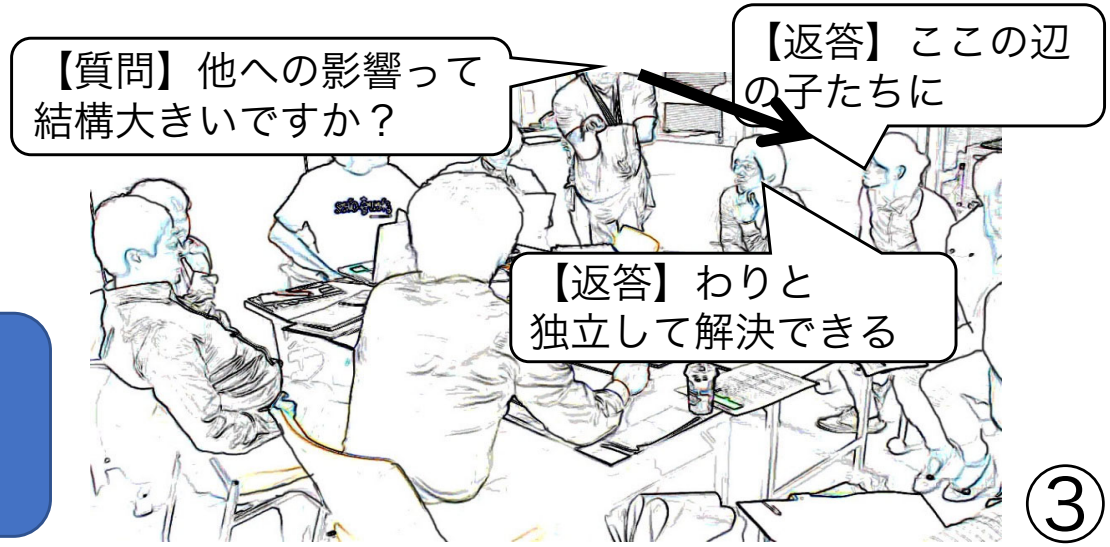
- 主な調査対象：展示制作のための多職種ミーティング（RT）
- 調査期間：2010年10月1日～2012年3月末

種類	開始日	終了日	回数	時間数	時間数
RT	2011/2/3	2011/8/19	29回	69	68:47:13
分科会	2011/2/8	2011/8/5	18回	35	35:15:56
現場	2011/2/3	2011/8/12	15回	20	20:03:29
監修者・演出家	2010/10/16	2011/4/15	7回	14	14:19:55
定例	2010/10/7	2012/3/9	63回	99	99:11:41
その他	2011/2/3	2011/12/12	12回	25	24:34:02
計				262	262:12:16

何者として？<video>







参与者には自明だが
分析者にどうしたら
分かるか？

Why that *person* now?：「その発話」を「その人物」が行いうる/べきであることはどうやって判断できるのか？

5/10：現場での検証［video］

条件：

- 距離： 30/40/50 cm
- 速さ：速く/普通/ゆっくり

このフィールドの特徴

① 多職種チームで，

② 「展示」というまだ存在していない対象物を，構築していく

- 核となる実践：
  - チームの各自が多くの場合にはまだ潜在的な問題に「気づく」こと（第2部）
  - こうした気づきを他のメンバーとの間で「共有する」こと（第3部）

↑

事後的視点：

調査を終え，分析の焦点がある程度定まってきた段階で初めて言える

調査初期：
当事者には分かっているはずだが，
調査者には分からないこと
があまりに多い

フィールドでの最初のジレンマ

- 調査を開始しないことには…
  - どんな行動・動作が参与者にとって重要か分からない

＝分析対象とする現象（行動・動作）の種類を調査開始前に決めてしまうのは危険

- 的外れな（当事者の視点・意味からずれた）調査に

⇒フィールドで問いを見つける：

- 詳しく調べるに値する「問い」を調査を進めながら発見していく必要
- 他の多くの研究（対象とする行為・動作はあらかじめ決定）とは手順が逆

活動を推測する

- フィールドでの戸惑い：
  目の前で繰り広げられているさまざまな行動や現象が何のためのもので，どれが重要なのかがすぐには理解できない

↓

推奨する手順：
フィールド調査（の初期）に調査者が最も意識すべき観点は「活動」である

- 当該の行為・動作が「どのような活動の一部になっているか」想像し，その活動の名称や要点をなるべく的確に言語化することを試みる

注意：
ただし，行為とは異なり，活動は直接観察できない

⇒行為や動作といった観察できる＜手掛かり＞から「活動」を推測する

A. 上方への仮説構築

観察できる行為・動作などを＜手掛かり＞として，その場の活動の目的・動機を推測し，言語化（記述）してみる

往復

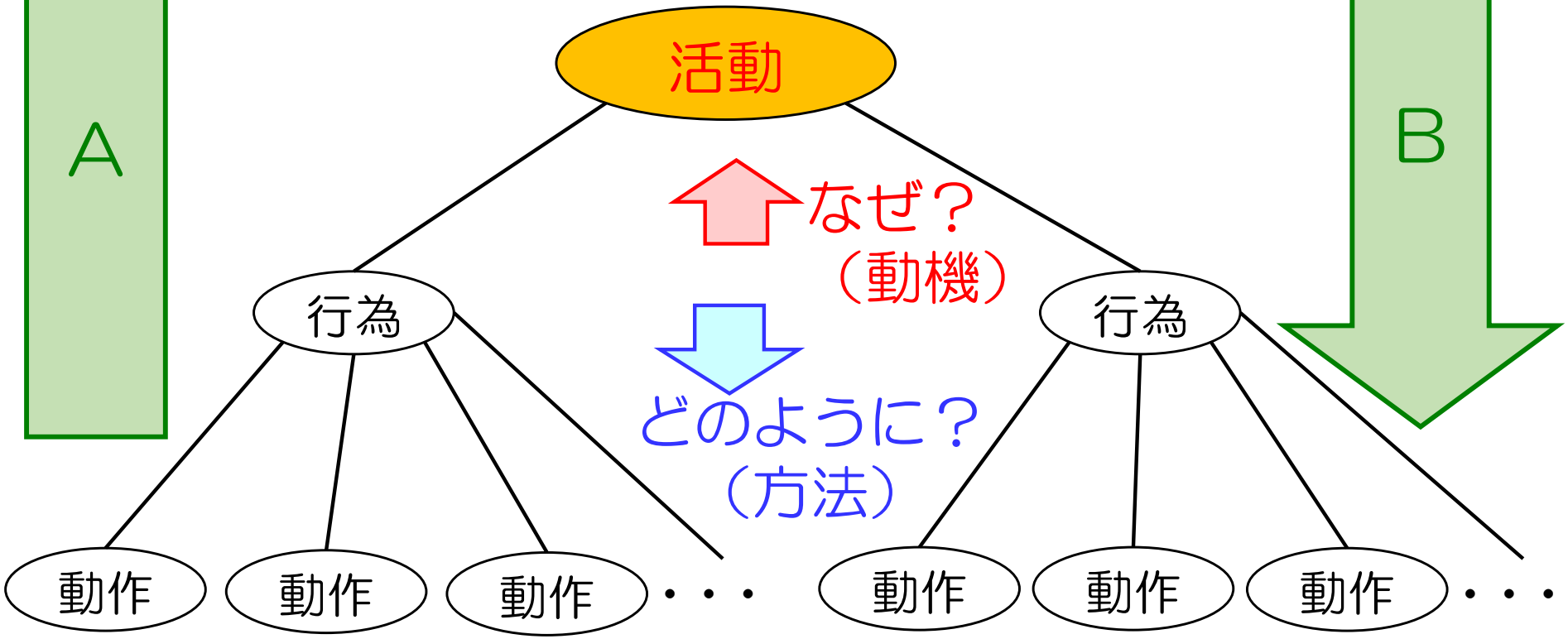
B. 下方への仮説検証

＜仮説＞としての活動の目標・動機についての記述が観察できる行動・現象と適合しているかを検証していく

A

B

＜仮説＞となる＝観察を導く



直接観察できる＝＜手掛かり＞になる

（Clark(1996)：上方への完成・下方への証拠を参照）

事例

JASS講習会（2021年3月）
日本語日常会話コーパス
by国立国語研究所

写真

【課題】

① この人たちはどんな（動機で）「活動」をしているか？

② そのように判断できる「証拠」（観察できる振る舞いや事物）は何か？

【着眼点の例】

言語も非言語も総動員

1. キーワード：何の「話題」か？
2. 成員カテゴリー：それぞれの人が「何者として」行為しているか？
3. 関与配分：それぞれの人はいつ・どんな「対象物」に関与しているか？

【スタンス】

- まずは複数の着眼点を参照しながら，どんどん仮説を立て，その予測を持ちながら観察を続けていく
  - 調査者が初期に参与者の視点に立てないのは当たり前

★予測を持つことによって初めて，観察がより具体的になる

活動概念の源泉１：活動タイプ

- 相互行為分析での「活動」
  - 分析内で用いられることは多いが，明確な定義は少ない
- Levinson(1979/1992)：行為レベルよりも上位の「活動」レベルを考慮する必要性を早くに主張
  - 目標によって規定され，社会的に構成され，境界づけられた出来事であり，参与者や状況などについての制約を伴う

    例）教育や就職面接，法的尋問，サッカーの試合，ワークショップでのタスク，ディナーパーティーなど
  - 中でも重要なのは許容されている貢献allowable contributionの種類に関する制約

▲D. Hymes：SPEAKINGモデル

- Setting(Scene)：状況としての時間と空間
- Participants：会話の参与者，話し手／聞き手，聴衆など
- Ends：会話の目的や期待される成果
- Act sequence：行為連鎖（何をどの順番で発話するか）
- Key：会話や行為の調子・雰囲気（冗談，からかい，皮肉，真面目，など）
- Instrumentalies：行為の手段（対面，電話，メールなど）や発話の形態（標準語，方言，絵文字など）
- Norms：適切性の解釈に関わる規範（話を遮る，順番を破る，など）
- Genre：ジャンル（会話，講義，祈り，広告，など）

▲共同活動（H. H. Clark）

1. 参与者：共同活動は2人以上の参与者によって実行される
2. 役割：各参与者は仕事の分担に関わる役割を担う
3. 公的目標：参与者は共通の公的目標を設定し，達成しようと試みる
4. 私的目標：参与者は個別に私的目標を達成しようとしてもよい
5. 階層：共同活動は階層的な複数の行為からなる
6. 手続き：慣習的および非慣習的手続きの両方を用いる
7. 境界：共同活動には開始と終了の境界がある
8. 動的性質：共同活動の中では，行為の同時進行や断続，伸縮，分割などが起こりうる

若干の保留と応用

- 西阪(2008)：行為は達成動詞，活動は過程動詞

⇒分析テクニック：

- 活動の中には参与者たちが「達成」を目指している何らかの「目標」があるはず
- 活動には「それが成功したら活動が『達成』に至ったと言える」ような何らかの「核となる行為」があるはず

  ＝許容されている貢献（Levinson）の中でも中心的なもの

活動概念の源泉2：EMCA周辺

- 相互行為分析：

  活動のような上位の概念を（個々の事例分析では用いられていることも多いが）簡単に参照することには慎重

  - 参与者たちが相互行為を組織化していく局所的な過程（relevance）を最重要視
  - 分析者が持ち込んだ「活動」についての仮定が参与者自身による認識とは異なった外在的なものである危険（Drew&Heritage, 1992; 好井, 1999；戸江, 2018）

- Garfinkel(1967)： Seen but unnoticed

  背後期待（シュッツなど）の議論の中で

  - 行為とその背後の状況との間には相互に規定し合う相互反映的reflexiveな関係

分析方法としての工夫

1. 分析者は参与者の視点に漸近すべく，A：上方への仮説構築とB：下方への仮説検証の間を往復
   - 分析者が調査初期に用いるドキュメント的解釈（Garfinkel, 1967）
2. 活動の名称や要点を「なるべく的確に言語化すること」を意識し，事例の観察を通じて常にこの記述をより的確なものへとブラッシュアップ
   - 予測を意識的に言語化：この記述が以降の事例観察との間で不整合を来した際に違和感を感知しやすい
     - 「絵本専門店で書店員たちが資料を使って注文する絵本を選定する」

▲フレーム（Goffman, 1974）
（安川(1991)，pp.10-11）

- フレーム：

  それ自体は意味をもたないむきだしの出来事の流れを，なんらかの組織だった意味のあるシーンとして経験させる，経験の組織化の前提，もしくはその「原理」（pp.10-11,21）

- フレーミング：

  経験の組織化にともなう，あるいはこれを支える活動の組織化（p.247）であり，したがって関与の組織化でもある（p.345）

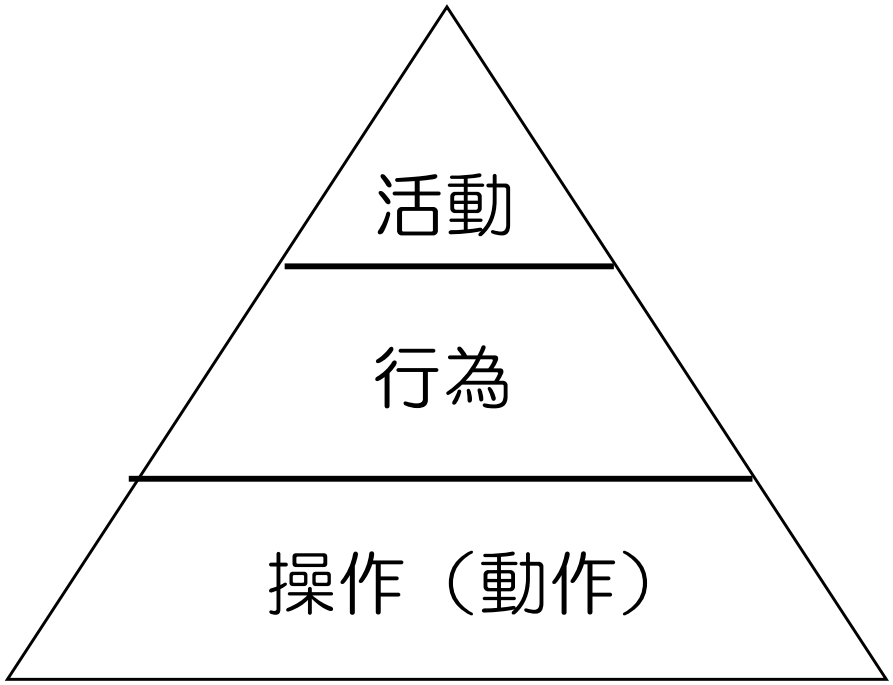
活動概念の源泉3：活動理論

- 活動：動機に貫かれた一連の行為
  - 人間（や動物）が，
  - ある動機（目標）に基づいて，
  - 環境や対象物に向かって，
  - 道具や記号を手段として，
  - ある時には協働しながら，

    行う，有意味で能動的な実践．

どんな状態になれば「達成」と言えるかを考えるとよい

A. レオンチェフ

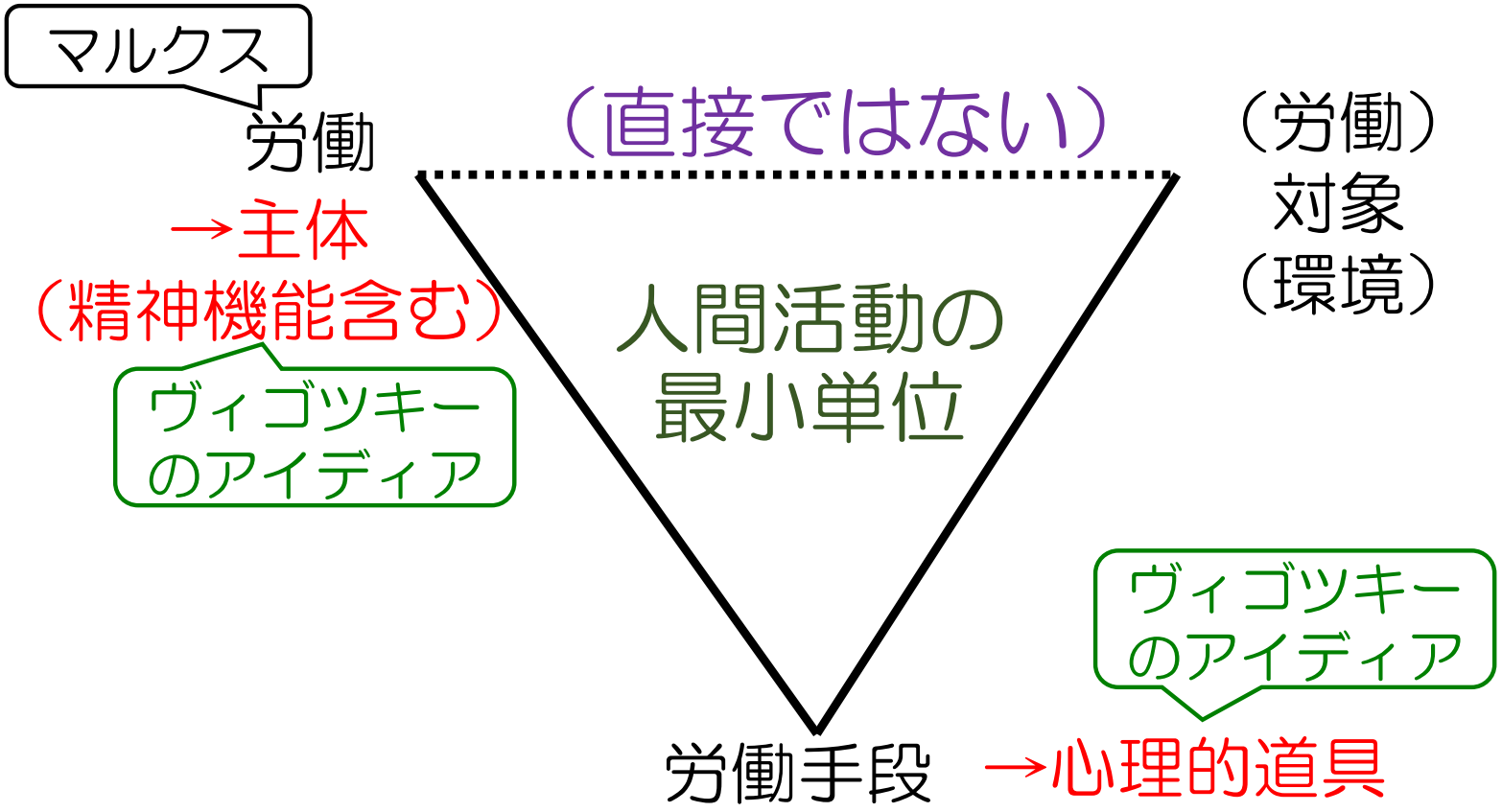


動機
「なぜするのか」

目標
「何をするのか」

条件
「どのようにするのか」

Vygotsky：媒介と心理的道具



- 労働過程論（マルクス）を精神機能（心理学）に拡張

1. 人間は心理的道具（言語・記号など）の媒介によって対象（環境）と関わることができる
2. 人間の精神機能は心理的道具によって形成されていく

Vygotsky派（ワーチ1995訳者あとがきより）

- 人間の高次精神機能の活動は道具や記号によって媒介されている

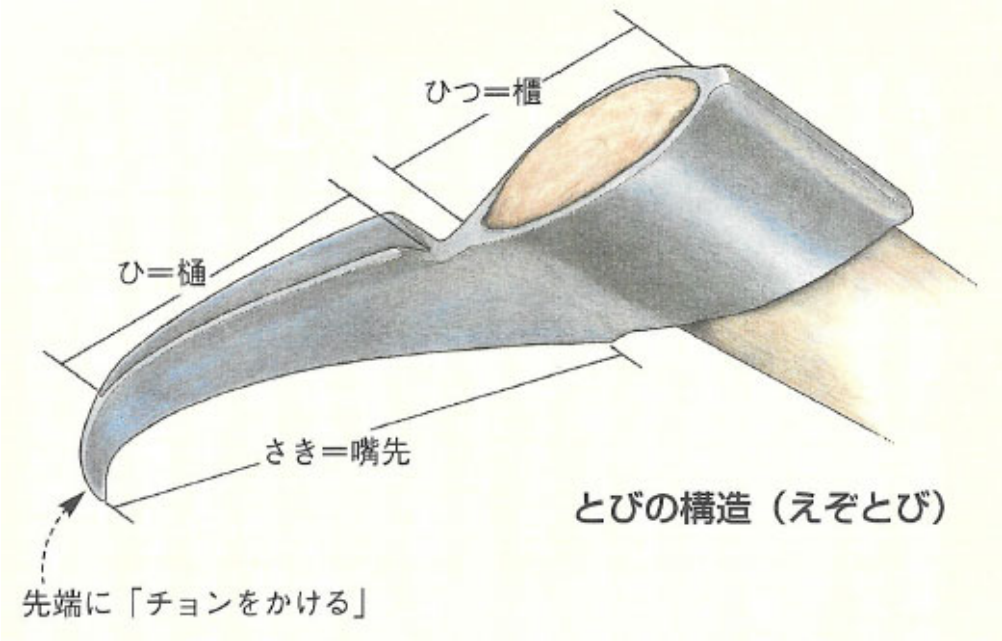
1. 人間の活動は，道具使用そのものによって変形され形作られるという意味で，道具的媒介を考慮することなくしては理解できない
   - 道具に媒介された行為：人間活動の最小の分析単位
2. 人間活動を主体ー対象の二者関係ではなく，主体ー道具ー対象の三者関係として捉える
3. 物理的・技術的道具と心理的道具
   - 前者は自然の征服に向けられた外的活動の手段
   - 後者は他者や自らの活動に対する働きかけに用いられる，人間自身の活動に向けられた内的手段

レオンチェフのアイディア
（Daniels, 2001より）

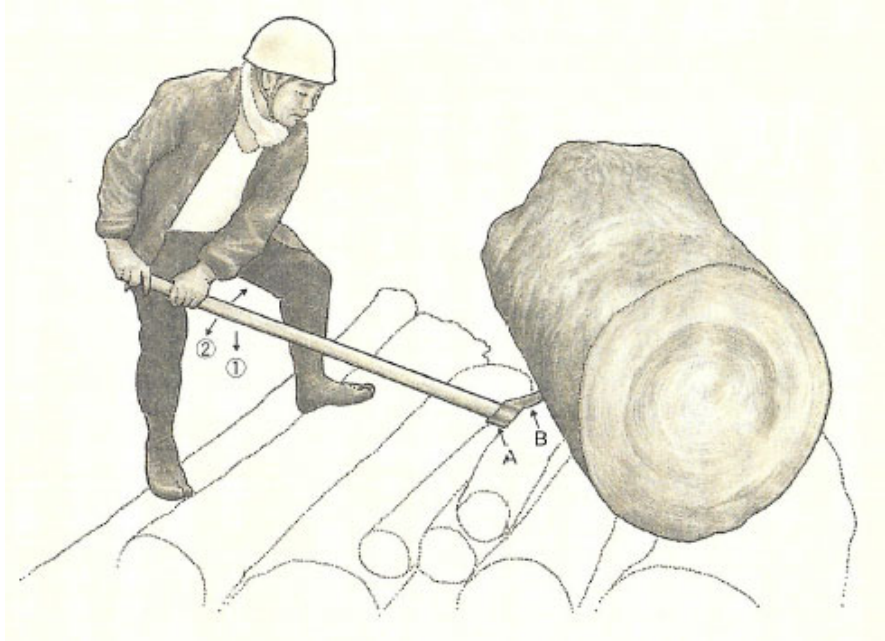
- 行為の背後にある活動
  なぜ分離された諸行為が意味あるものであるのかを理解するためには，活動全体の背後にどのような動機があるのかを理解しなければならない．活動は動機によって導かれている
- 活動：対象と動機
  活動を他の活動から区別する主要なものはその対象の違いである．活動の対象の移行と発展はそれを突き動かす動機と関係している
- 行為と活動：
  - 行為は短期的なもので，時間に明確な始めと終わりがある
  - 活動システムは社会-歴史的時間をかけて発展していくものであり，しばしば制度や組織の形態をとるものである
- 行為と操作：行為には，
  - 意図的な側面（何がなされるべきか）とは別に，
  - それ自身の操作的側面（それがいかになされうるか）がある．…それによって行為が実行される手段を「操作」と名づける

野沢温泉村道祖神祭りの準備作業<video>

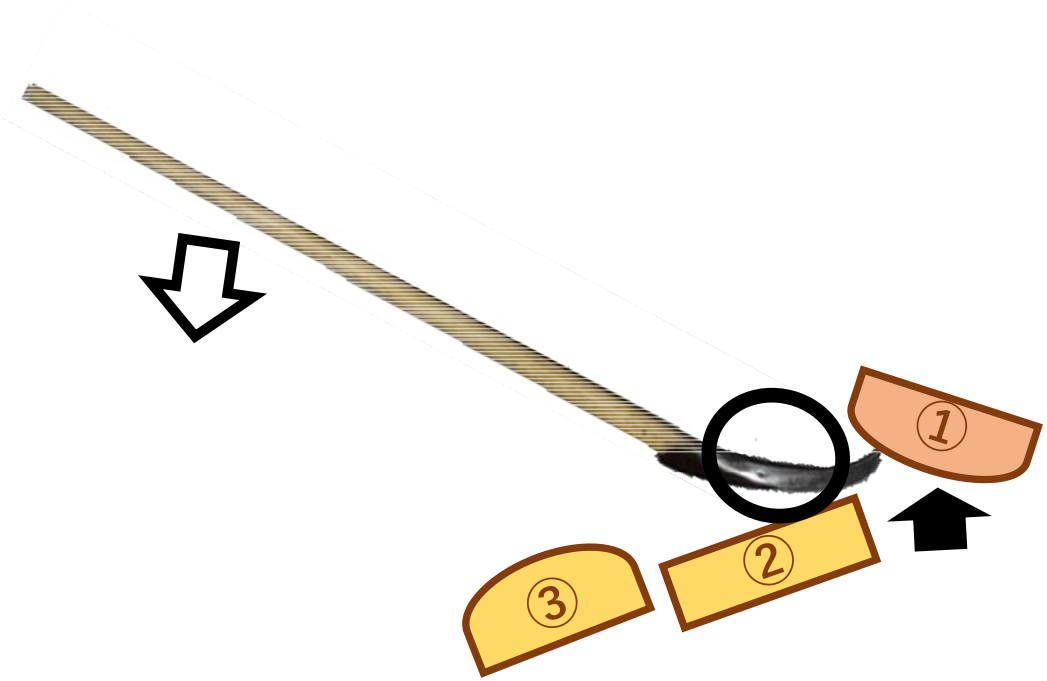
月刊『林業新智識』(2008) p.55より



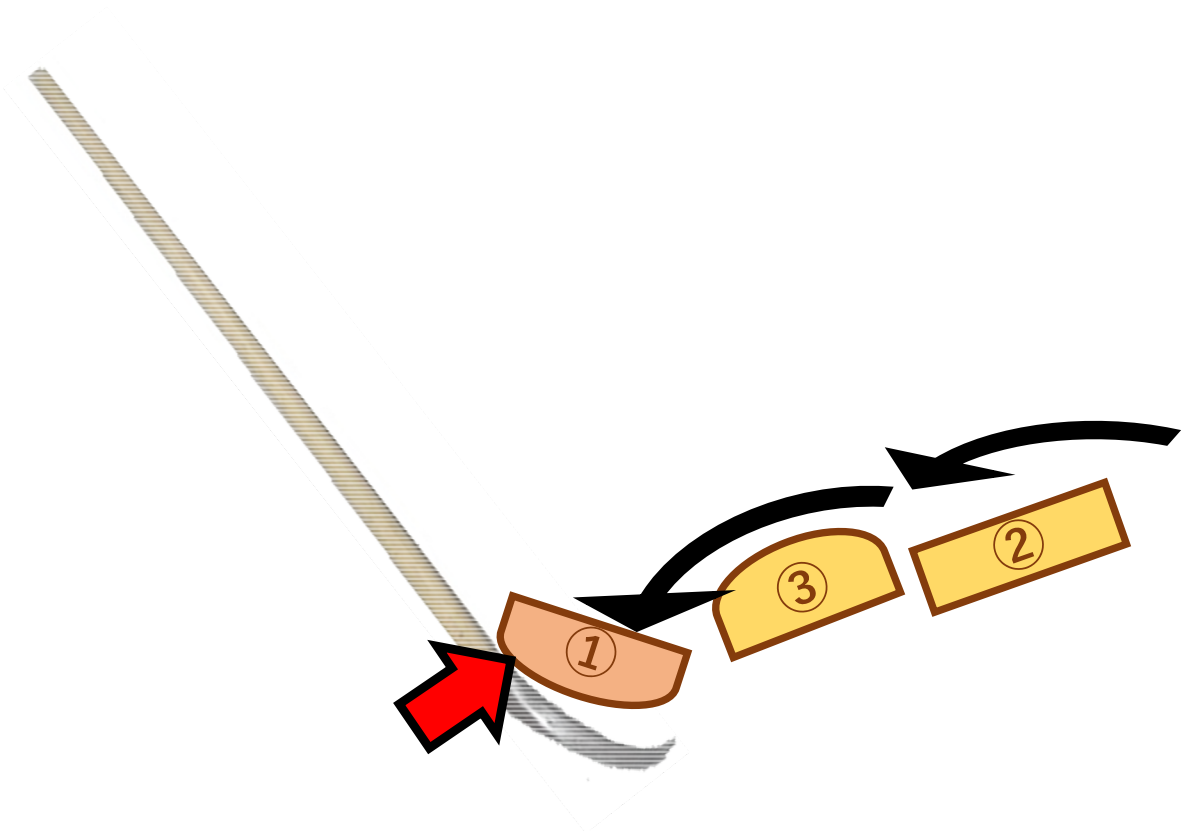
とびの構造（えぞとび）



歴史文化的次元：真副が最初に採用した向きは継承？


①
②
③

①
②
③



操作的次元：動き出した材木を受け止められる

三夜講：道祖神祭り運営の社会システム

前・三夜講
（保存会）

現・三夜講

次・三夜講

寶友会　成翔会　煌心会　励翔会　真心会　光駿会　友想会　・・・

2018
世話人

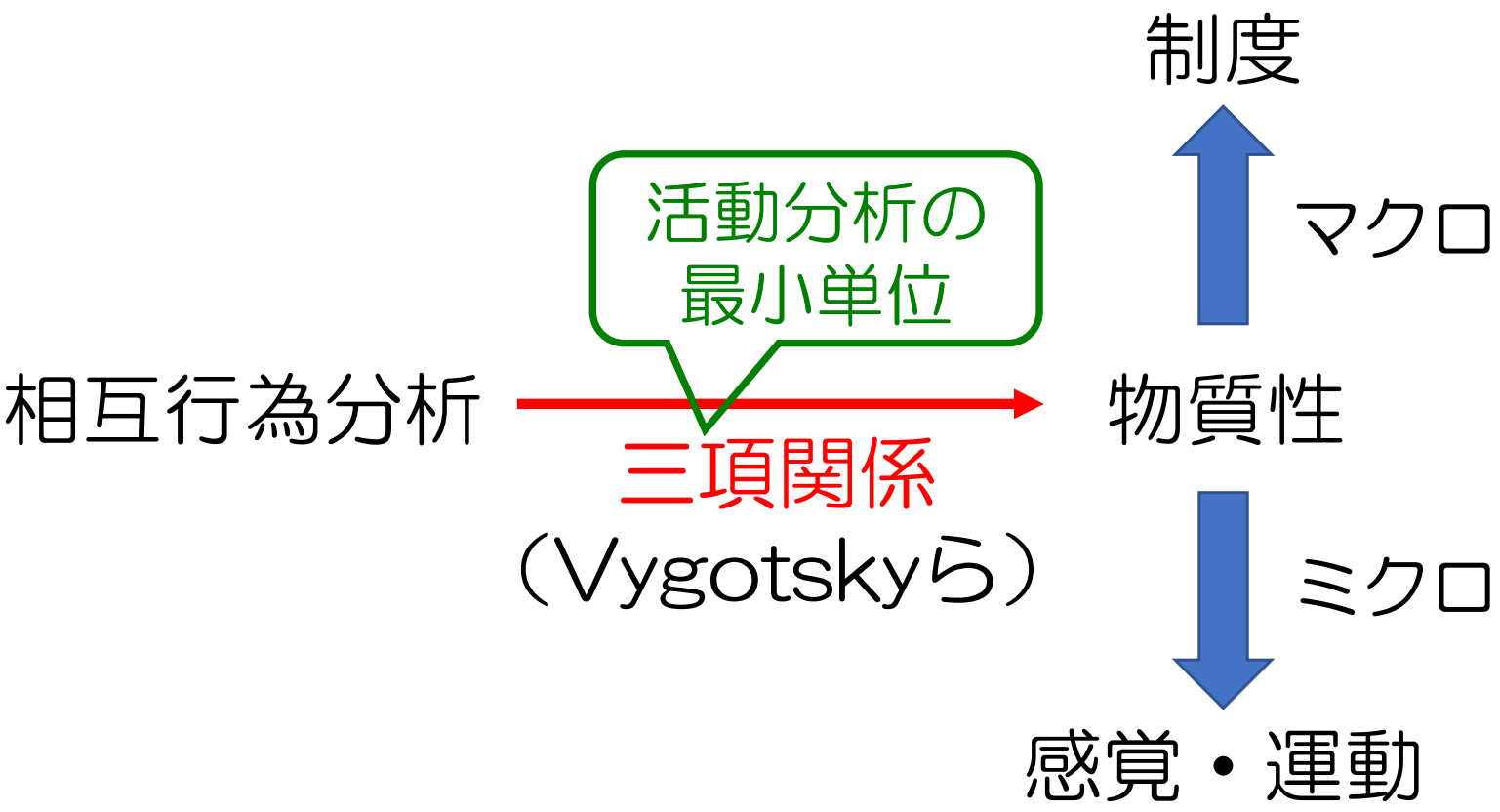
42歳厄年

- 指示責任者は光副
- 熟練者は真副

↓

物の操作に刻印された成員性の違い

おわりに：フィールドワークと物質性



髙梨克也(近刊)「成員性と物質―物の個性と道具の特性に関する経験の共有―」，榎本美香編『三夜講で火祭りを準備する～野沢温泉道祖神祭りの伝承を支える多世代協働インタラクション～』（シリーズ「フィールドインタラクション分析」第5巻，ひつじ書房）